

第2章

子どもの学びの育ち

第1節 ＊ 幼児期から小1生の学びの育ち

田村徳子

幼児期の文字・数に関する育ちは学年があがるにつれてできる割合が増え、年長児で8～9割ができていた。一方、生活習慣の育ちには個人差があり、年長児では6～7割の項目もあった。学びに向かう力や思考はゆるやかに育まれる様子がみられた。

子どもは乳幼児期に自らのまわりの世界と出あい、物事への興味や関心をさまざまに広げていく。そして、親や祖父母、友だち、地域の人とかかわりながら育っていく。本調査では、幼児期から小学校の学習生活に移行し適応するために必要とされる力に注目し、3つの軸「生活習慣」「学びに向かう力」「文字・数・思考」を置いて調査を行った。この章では、母親の目を通して、家庭での子どもの学びの育ちをみていく。

1. 幼児期の生活習慣の育ちには、個人差がみられる

本調査では幼児期に必要な学びの育ち48項目、小1生では18項目について、子どもの様子を「とてもあてはまる」から「ぜんぜんあてはまらない」までの4段階で回答してもらった。

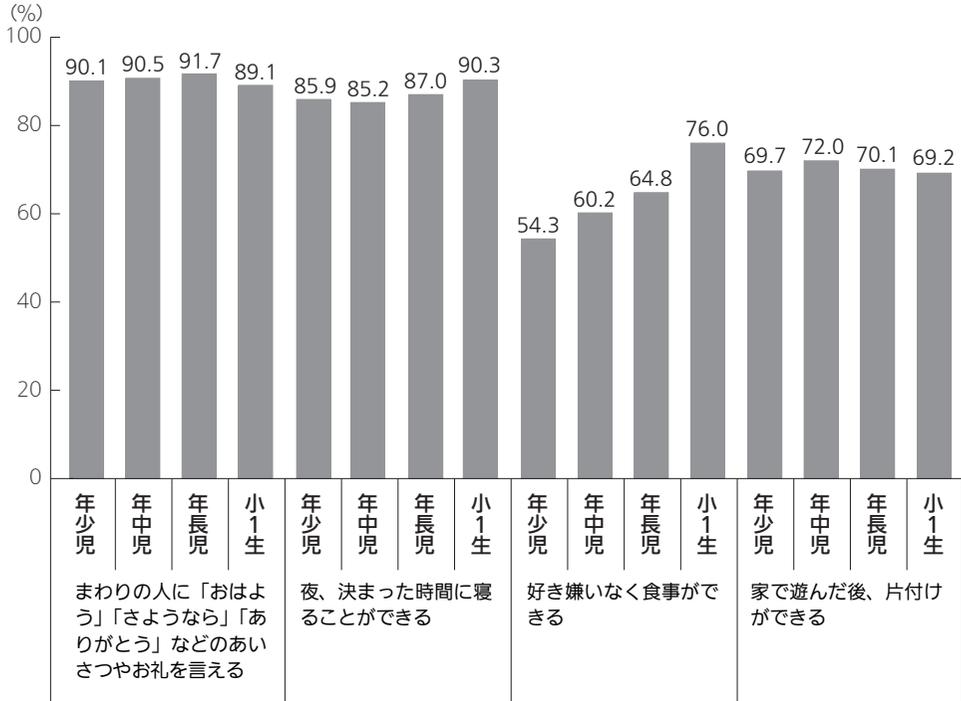
図2-1-1は、生活習慣について、年少児から小1生までの子どもができる割合をみたものである。「まわりの人に『おはよう』『さようなら』『ありがとう』などのあいさつやお礼を言える」と「夜、決まった時間に寝る

ことができる」はどの学年でも85%以上の母親が「とてもあてはまる」あるいは「まああてはまる」と回答した。生活習慣の中でも、あいさつやお礼、生活リズムは年少児の1～2月の時期までに築かれるようだ。

一方、「好き嫌いでなく食事ができる」は年少児54.3%、年中児60.2%、年長児64.8%、小1生76.0%と学年があがるにつれて「とても+まああてはまる」の割合が増えていくが、年長児で7割に満たなかった。また、「家で遊んだ後、片付けができる」は年少児から小1生まで7割前後にとどまった。子どもが小学校に入学する段階で、規則的な就寝や、あいさつやお礼はある程度できる一方、食事の好き嫌いや片付けなど身の回りのことがうまく整えられない場合もあることがうかがえた。

表2-1-1は、生活習慣の育ちを性別でみたものであるが、男子と女子とで大きな差はみられなかった。同様に学年別でも大きな差はみられなかった。幼児期の生活習慣の育ちは、あいさつやお礼、生活リズムは築かれつつあるが、なかには個人差がみられるものもあるようだ。

図2-1-1 生活習慣の育ち（学年別）



注1) 「とても+まああてはまる」の%。

注2) 年少児～年長児は7項目、小1は5項目のうち、4項目を図示。

注3) サンプル数は、年少児 1,366人、年中児 1,223人、年長児 1,125人、小1生 1,285人。

表2-1-1 生活習慣の育ち（学年別・子どもの性別）

(%)

	年少児		年中児		年長児		小1生	
	男子 (695)	女子 (669)	男子 (594)	女子 (627)	男子 (543)	女子 (580)	男子 (636)	女子 (649)
まわりの人に「おはよう」「さようなら」「ありがとう」などのあいさつやお礼を言える	88.0	92.3	89.9	91.0	90.6	92.6	88.8	89.4
夜、決まった時間に寝ることができる	84.2	87.7	87.0	83.6	86.2	87.6	89.5	91.0
好き嫌いなく食事ができる	51.8	57.0	60.3	60.2	62.8	66.5	74.8	77.1
家で遊んだ後、片付けができる	68.8	70.7	70.4	73.5	69.1	71.0	65.3	73.1

注1) 「とても+まああてはまる」の%。

注2) 網かけは同学年の男子と女子とで5ポイント以上の差があるもの。

注3) 年少児～年長児は7項目、小1生は5項目のうち、4項目を図示。

注4) () 内はサンプル数。

2. 学びに向かう力は、学年があがるにつれてゆるやかに育まれる

右ページの図2-1-2は、年少児から小1生まで、学びに向かう力について「とてもあてはまる」と「まああてはまる」を合わせた数値をみたものである。「好きなことに集中して遊べる」、「わからないことについて、『なぜ、どうして』など、まわりに質問ができる」、「生き物や植物に興味をもてる」など好奇心に関する項目をみると、年少児から年長児まで、ほぼ一定の割合で、母親の87%以上が「とてもあてはまる」あるいは「まああてはまる」と回答した。また、「困ったことがあったら、まわりの人に助けを求めることができる」、「人に自分の気持ちを伝えたり、相手の意見を聞いたりすることができる」、「友だちからいやなことをされたら、『いや』『やめて』などと言える」など自分なりの思いや考えを伝えたり、貫き通そうとする自己主張や主体性に関する項目でも、年少児から小1生まで、8割前後でほぼ一定していた。

一方、「夢中になっていることでも、時間がくれば、次のことに移ることができる」、「物事をあきらめずに、挑戦することができる」、

「どんなことに対しても、自信をもって取り組める」など自分の行動を必要に応じて調整する自己抑制に関する項目はどうだろうか。「物事をあきらめずに、挑戦することができる」をみると、年少児で56.8%、年中児で64.3%、年長児で69.2%、小1生で69.0%と幼児期では学年があがるにつれて増えていた。他の2つの項目も同様に6割前後でゆるやかに増えていた。「遊びなどで友だちと協力することができる」、「自分がやりたいと思っても、人のいやがることはがまんできる」、「人の話が終わるまで静かに聞ける」など協調性に関する項目も、幼児期で学年があがるにつれてゆるやかに増えていた。

自己抑制や協調性は、親や友だちなど、人とかかわり合うなかで学び育まれるものである。また、かかわるなかで、自分の内面の世界である自己主張や主体性もさらに育っていく。本調査の結果から、その育ちは、ゆるやかに進む様子が見られた。

表2-1-2は学びに向かう力の育ちを性別でみたものである。学年があがるにしたがってゆるやかに増える自己抑制や協調性に関する項目の場合、女子が男子に比べて割合が高い傾向が見られた。

表2-1-2 学びに向かう力の育ち（学年別・子どもの性別）

(%)

	年少児		年中児		年長児		小1生	
	男子 (695)	女子 (669)	男子 (594)	女子 (627)	男子 (543)	女子 (580)	男子 (636)	女子 (649)
好きなことに集中して遊べる	97.5	97.0	97.7	96.9	98.4	97.8	98.4	96.4
わからないことについて、『なぜ、どうして』など、まわりに質問ができる	91.5	93.7	92.8	93.2	91.2	93.6	86.9	87.0
生き物や植物に興味をもてる	86.1	90.6	86.7	89.8	86.8	87.2	74.7	76.1
困ったことがあったら、まわりの人に助けを求めることができる	81.8	<87.2	86.9	86.3	84.2	84.5	84.9	86.2
人に自分の気持ちを伝えたり、相手の意見を聞いたりすることができる	73.1	<80.3	82.2	84.3	84.4	86.9	84.3	89.2
友だちからいやなことをされたら、『いや』『やめて』などと言える	81.4	85.7	86.0	87.9	86.8	85.7	88.9	85.0
夢中になっていることでも、時間がくれば、次のことに移ることができる	53.7	<65.5	62.3	65.1	63.4	<69.7	59.6	<67.7
物事をあきらめずに、挑戦することができる	52.2	<61.6	60.9	<67.5	65.9	<72.4	62.3	<75.5
どんなことに対しても、自信をもって取り組める	53.2	<64.9	58.9	<65.4	60.0	<70.2	63.0	<71.3
遊びなどで友だちと協力することができる	84.0	<91.1	91.5	94.3	93.0	96.2	93.5	97.3
自分がやりたいと思っても、人のいやがることはがまんできる	65.2	<75.1	77.3	<82.8	79.2	<87.1	82.4	<89.6
人の話が終わるまで静かに聞ける	64.2	<74.2	68.2	<79.1	74.0	<81.3	71.6	<80.4

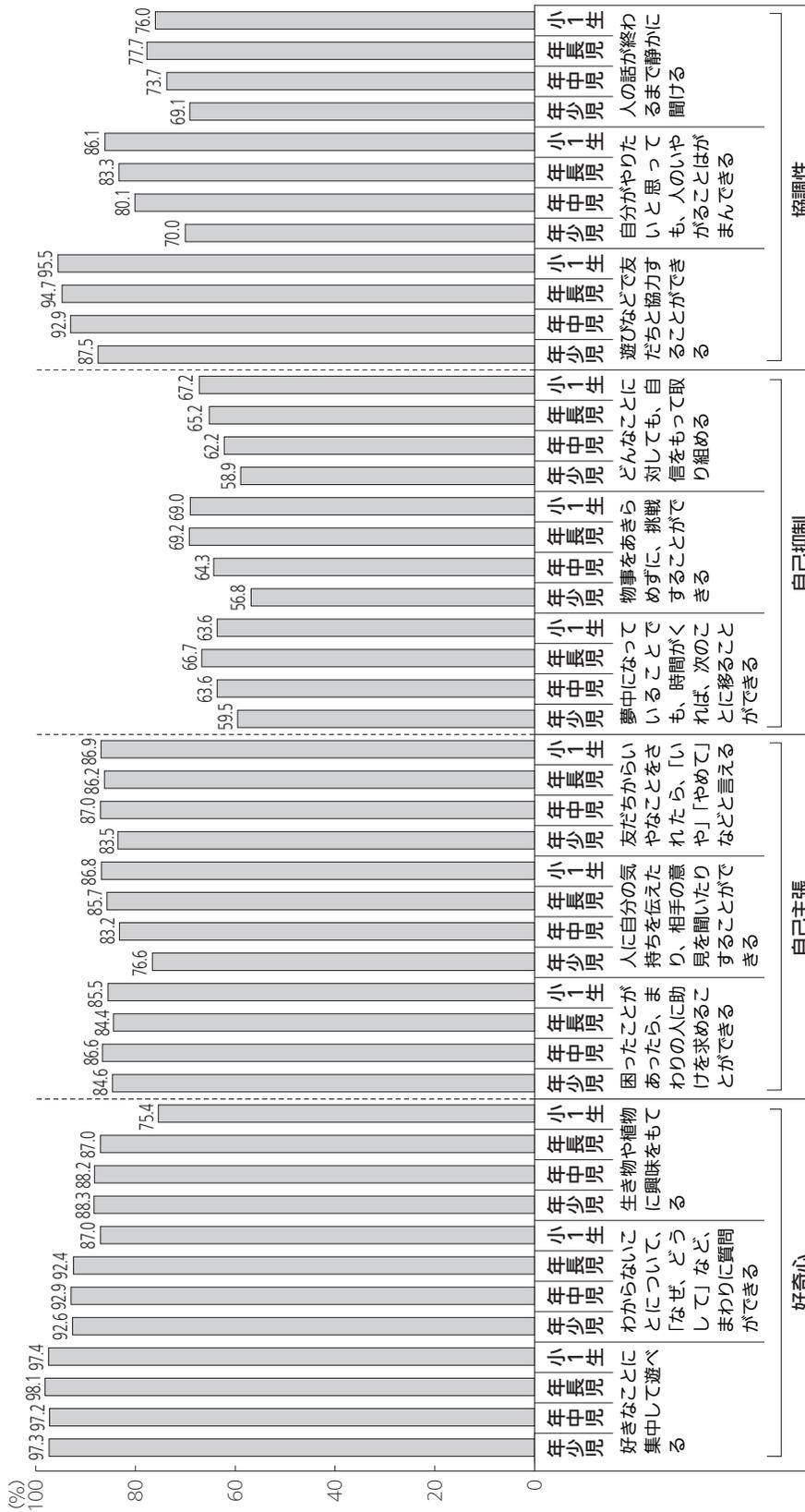
注1) 「とても+まああてはまる」の%。

注2) 網かけは同学年の男子と女子とで5ポイント以上の差があるもの。< >は5ポイント以上の差、<< >>は10ポイント以上の差。

注3) 年少児～年長児は24項目、小1生は12項目のうち、12項目を図示。

注4) () 内はサンプル数。

図2-1-2 遊びに向かう力の育ち（学年別）



注1) 「とても+まああてはまる」の%。
 注2) 年少児～年長児は24項目、小1生は12項目のうち、12項目を图示。
 注3) サンプル数は、年少児1,366人、年中児1,223人、年長児1,125人、小1生1,285人。

3. 文字・数・思考は、学年があがるにつれてできる割合が増えていく

右ページの図2-1-3は、年少児から年長児まで、文字・数・思考の育ちについて「とてもあてはまる」と「まああてはまる」を合わせた数値をみたものである。

「自分の名前を読める」、「かな文字を読める」、「自分の名前をひらがなで書ける」など文字に関する項目や、「1、2、3、4と、20までの数を正しく数えられる」、「指やおはじきなどを使って、数を足したり、引いたりすることができる」など数に関する項目は、学年があがるにつれて大幅に増えていた。「自分の名前をひらがなで書ける」については、年少児で45.5%、年中児で86.0%、年長児97.7%と年少児から年長児までで52.2ポイント増えていた。「えんぴつを正しく持てる」、「絵本や図鑑を1人で読める」など、小学校

での学習生活につながる項目でも同様だった。

一方、「身の回りにあるものの長さや大きさ、高さを直接並べて比べられる」、「ことばで『多い』『少ない』『大きい』『小さい』を正しく使える」、「自分のことばで順序をたてて、相手にわかるように話せる」など論理的な思考力に関する項目は、年少児から年長児にかけて、文字や数に比べてゆるやかに増えていた。たとえば、「自分のことばで順序をたてて、相手にわかるように話せる」の場合、年少児で71.4%、年中児で81.2%、年長児で85.5%だった。

表2-1-3は文字・数・思考の育ちを性別でみたものである。「かな文字を読める」など文字に関する項目や「絵本や図鑑を1人で読める」の項目で、女子が男子に比べてあてはまる割合が多い傾向がみられた。

表2-1-3 文字・数・思考の育ち（年少児～年長児・学年別・子どもの性別） (%)

	年少児		年中児		年長児	
	男子 (695)	女子 (669)	男子 (594)	女子 (627)	男子 (543)	女子 (580)
自分の名前を読める	79.1	< 87.7	95.5	98.1	97.9	99.1
かな文字を読める	58.4	<< 70.0	81.9	< 89.7	92.1	< 97.7
自分の名前をひらがなで書ける	31.8	<<< 59.6	77.4	< 94.1	96.5	98.8
1、2、3、4と、20までの数を正しく数えられる	80.6	< 86.5	94.4	95.1	97.2	97.6
指やおはじきなどを使って、数を足したり、引いたりすることができる	27.8	27.4	65.0	68.9	85.8	87.4
自分のことばで順序をたてて、相手にわかるように話せる	68.5	< 74.4	80.2	82.1	82.9	< 87.9
えんぴつを正しく持てる	52.6	< 72.2	73.8	< 83.8	83.5	86.2
絵本や図鑑を1人で読める	48.8	< 55.0	69.3	< 79.5	84.0	< 92.1

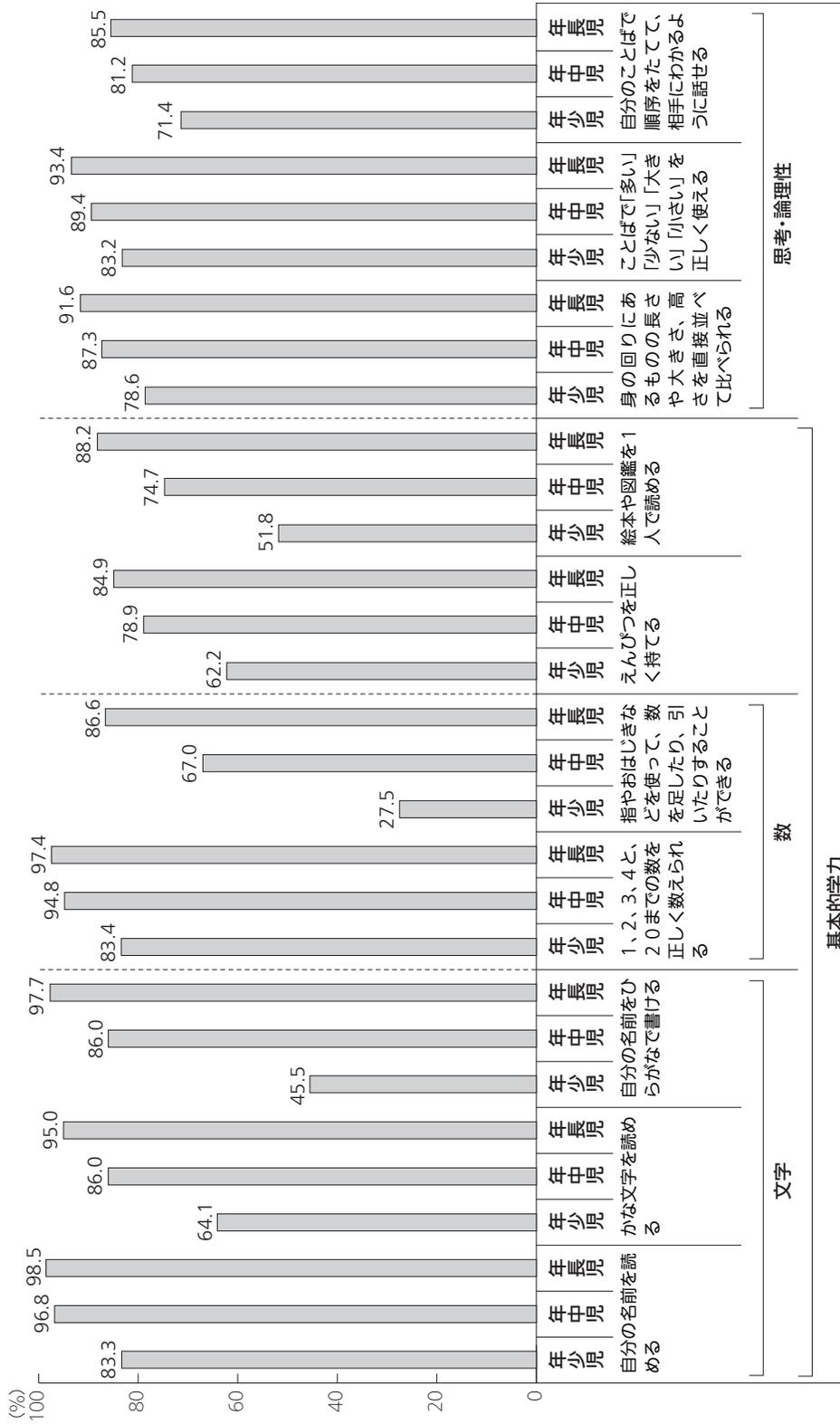
注1) 「とても+まああてはまる」の%。

注2) 網かけは同学年の男子と女子とで5ポイント以上の差があるもの。< >は5ポイント以上の差、<< >>は10ポイント以上の差。

注3) 17項目のうち、8項目を図示。

注4) ()内はサンプル数。

図2-1-3 文字・数・思考の育ち（年少児～年長児・学年別）



注1) 「とても+まああてはまる」の%。
 注2) 17項目のうち、10項目を図示。
 注3) サンプル数は、年少児 1,366人、年中児 1,223人、年長児 1,125人、小1生 1,285人。

第2節 ＊ 月齢による特徴

荒牧美佐子



ここでは、幼児期から小学校の時期にかけて必要とされる力を、さらに「生活習慣」「自己主張」「自己抑制」「協調性」「好奇心」「思考・論理性」「基本的学力」の7つの領域に分け、それぞれの力がどのように伸びていくのか、学年・月齢による比較を行った。その結果、月齢とともに徐々に獲得されていく力とそうでない力とがあることが明らかになった。

1. 年齢とともに伸びる力、伸びにくい力、年齢によって求められる水準が異なる力

表2-2-1は、各項目について母親が「とてもあてはまる」と答えた割合をまとめたものである。ここには「まああてはまる」という回答の割合を加えていないため、ほとんどの項目において達成率が5割に満たないが、表の数字が示しているのは、母親の目を通して、ほぼ確実にクリアできているであろう子どもの割合である。

まず、「生活習慣」に関しては、ほとんどの項目で、学年の上昇とともにできる割合が増える傾向にある。しかし、「まわりの人に『おはよう』『さようなら』『ありがとう』などのあいさつやお礼を言える」、「家で遊んだ後、片付けができる」については、幼稚園・保育所から小学校にあがる移行期において、8～11ポイント下がっている。これは、幼児期にできていたことができなくなるというよりも、自ら進んではやらなくなるということを示しているのかもしれない。

このように、同じ学年内で比べると月齢の上昇とともにポイントは上がっていても、学年が変わるタイミングでポイントが下がる項目が多くある。「自己主張」や「協調性」、「自己抑制」に関する項目は、そのほとんどがこれにあてはまる。「好奇心」「思考・論理性」でも幼児期で、同じ傾向がみられる（小1生

への調査は実施していない）。

こうした結果が得られた要因の一つには、これらの質問項目に、園などの集団生活において判断しやすいものが多く含まれていることが考えられる。母親が子どもを評価する際、同学年の他児と比較すると、同じ学年の中でも月齢の高い子どもは、低い子どもよりも「できている」と判断されやすくなるだろう。また、子どもの学年に応じて、「できている」と判断される水準が異なる可能性があることも要因としてあげられる。たとえば、友だちと仲良く遊ぶために必要なルールや社会的なスキルなどは、子どもの学年があがるとともに、より複雑なものになっていく。したがって、「遊びなどで友だちと協力することができる」かどうかをたずねられた場合、年中児と年長児とでは、「できている」と判断されるポイントが異なるだろう。これらのことから、一部の項目において、同じ学年間では、月齢による力の向上がみられるが、学年をまたぐ箇所で減退してしまうようにみえるといった結果に結びついたりと考えられる。

さらに、小さな前進と後退を繰り返しながらも、徐々に達成率が高まっていくものと、学年の上昇とはあまり関連のないものがある。たとえば、表2-2-1に示した「とてもあてはまる」の値に「まああてはまる」を加えても（図表は割愛）、小1生の段階で達成率が7割に満たない項目として、「夢中に

表2-2-1 年少児から小1生における学びの育ちの分類（学年別）

（％）

	年少児		年中児		年長児		小1生	
	低年齢群 (679)	高年齢群 (680)	低年齢群 (602)	高年齢群 (615)	低年齢群 (565)	高年齢群 (559)	低年齢群 (649)	高年齢群 (634)
生活習慣								
1人でトイレでの排泄、後始末ができる	29.6	41.0	48.5	56.3	70.8	73.5	83.8	90.7
まわりの人に「おはよう」「さようなら」「ありがとう」などのあいさつやお礼を言う	35.8	43.2	43.2	43.4	43.0	45.6	33.7	35.6
夜、決まった時間に寝ることができる	32.1	30.4	35.2	31.5	33.5	30.9	36.7	39.3
好き嫌いなく食事ができる	15.3	17.1	17.3	17.2	19.1	20.4	25.6	32.2
家で遊んだ後、片付けができる	14.6	19.9	20.8	19.2	20.7	24.2	15.4	22.2
脱いだ服を自分でたためる	19.0	24.9	30.2	32.8	33.1	38.6	—	—
食事が終わるまで、席に座ってられる	23.0	28.8	32.7	34.1	35.2	38.8	—	—
自己主張								
困ったことがあったら、まわりの人に助けを求めることができる	27.2	29.1	25.6	31.5	25.3	28.1	23.3	27.3
人に自分の気持ちを伝えたり、相手の意見を聞いたりすることができる	16.3	24.7	18.3	27.3	23.9	31.3	21.1	26.8
友だちからいやなことをされたら、「いや」「やめて」などと言える	29.7	39.7	36.5	33.4	36.4	31.0	34.2	28.7
友だちとけんかをして、あやまるなどして仲直りができる	20.0	25.0	24.6	29.3	30.8	32.2	27.3	35.2
遊ぶとき、「入れて」「一緒に遊ぼう」「貸して」など友だちに声かけができる	30.8	39.6	43.0	43.4	41.6	47.4	—	—
自分が何をやりたいかと言える	35.3	43.1	35.7	38.5	28.1	35.2	—	—
ほしいもの、してほしいことを大人に頼める	46.2	47.8	44.7	47.5	37.5	41.5	—	—
友だちと意見が違っても、自分の考えを主張することができる	21.9	25.0	21.9	23.1	20.0	21.6	—	—
協調性								
遊びなどで友だちと協力することができる	21.8	33.2	35.7	43.7	41.1	48.3	33.9	41.6
遊びなどで順番が回ってくるまで待てる	24.6	35.7	41.0	44.1	41.4	46.5	43.6	49.5
自分がやりたいと思っても、人のいやがることはがまんできる	8.2	16.6	14.5	20.3	19.8	27.0	21.6	26.5
人の話が終わるまで静かに聞ける	10.9	16.3	16.1	23.1	21.2	26.1	21.0	21.9
ルールを守りながら遊べる	14.7	25.4	26.9	35.3	32.9	43.6	—	—
自己抑制								
夢中になっていることでも、時間がくれば、次のことに移ることができる	9.4	9.7	11.5	13.3	11.5	17.4	12.9	12.8
遊びを中断されても、時間をおいて続けられる	10.8	12.2	14.8	19.2	14.3	20.0	21.0	21.6
勉強を中断されても、時間をおいて続けられる	—	—	—	—	—	—	17.7	18.5
物事をあきらめずに、挑戦することができる	8.8	11.8	11.5	14.5	14.3	20.6	15.3	18.0
どんなことに対しても、自信をもって取り組める	7.4	10.3	8.8	10.9	7.8	14.1	9.9	12.5
自分でしたいことがうまくいかないと、工夫して達成しようとする事ができる	6.5	10.1	11.3	15.9	15.4	22.0	—	—
一度始めたことは最後までやり通せる	9.3	10.3	12.5	15.6	16.8	20.9	—	—
好奇心								
好きなことに集中して遊べる	61.4	67.8	65.6	69.8	65.7	70.8	—	—
わからないことについて、「なぜ、どうして」など、まわりに質問ができる	51.1	60.3	55.3	60.2	50.8	54.4	—	—
新しいことに好奇心をもてる	50.4	58.2	50.0	58.0	46.4	55.5	—	—
生き物や植物に興味をもてる	42.9	49.0	41.7	48.6	41.2	46.5	—	—
工夫して遊べる	32.1	42.2	39.4	47.2	42.7	49.0	—	—
思考・論理性								
生活の場面で形にかかわることばを使える（まる、さんかく、しかくなど）	51.4	63.1	62.6	73.0	71.0	74.8	—	—
形について同じ仲間を集められる	50.4	60.6	63.5	72.0	72.0	77.5	—	—
見聞きしたことをまわりの人に話することができる	35.6	51.0	52.5	65.4	60.4	63.0	—	—
ことばで「多い」「少ない」「大きい」「小さい」を正しく使える	33.6	46.6	45.7	56.4	53.8	62.6	—	—
身の回りにあるものの長さや大きさ、高さを直接並べて比べられる	29.3	37.1	42.0	48.9	53.3	58.9	—	—
自分のことばで順序をたて、相手にわかるように話せる	16.1	25.6	25.2	34.1	31.9	37.6	—	—
基本的学力								
自分の名前を読める	56.1	72.4	82.4	87.5	89.7	90.5	—	—
かな文字を読める	32.0	51.6	62.0	74.6	81.9	84.6	—	—
自分の名前をひらがなで書ける	18.9	38.4	65.3	73.2	84.8	88.2	—	—
ことば遊びができる（しりとり、だじゃれなど）	22.4	38.5	55.1	67.5	71.9	75.0	—	—
1、2、3、4と、20までの数を正しく数えられる	49.9	63.5	76.9	80.3	84.4	87.7	—	—
「1個、1本・・・」などの数え方ができる	11.8	18.4	24.6	35.8	34.9	47.8	—	—
10までの数字を書ける	11.8	24.9	45.7	56.9	75.2	80.3	—	—
指やおはじきなどを使って、数を足したり、引いたりすることができる	5.3	15.9	27.9	42.0	52.4	63.5	—	—
絵本や図鑑を1人で読める	16.8	29.6	37.5	49.4	56.3	63.0	—	—
えんぴつを正しく持てる	19.3	29.4	35.7	39.5	43.4	46.7	—	—
英語で簡単なあいさつが言える	7.8	13.2	16.6	24.6	26.4	33.5	—	—

注1)「とてもあてはまる」の％。

注2)各学年における低年齢群とは10～3月生まれの幼児・児童を、高年齢群とは4～9月生まれの幼児・児童を指す。

注3)濃い網かけは、学年間で5ポイント以上、下がっているもの。薄い網かけは、学年間で1ポイント以上～5ポイント未満、下がっているもの。

注4)（ ）内はサンプル数。

なっていることでも、時間がくれば、次のことに移ることができる」、「どんなことに対しても、自信をもって取り組める」、「物事をあきらめずに、挑戦することができる」などがある。幼稚園や保育園と小学校とでは、学びへの構え方が異なるが、これらは、小学校での学びを支えるための構えともいえるだろう。そうした基礎となる重要な力は、年齢があがるだけで自然に身につくものではないようだ。

そして、表の一番下にある「基本的学力」については、上記の項目とは異なり、学年の上昇とともにポイントも上がっているのがわかる。数を正しく数えられる、自分の名前が書けるなどの項目は、小学校入学のために準備しておくこととして、多くの家庭で意識的に取り組まれているものであろう。いずれも、具体的な内容であるとともに、子どもの達成状況が把握しやすいため、こうした結果が得られたものと考えられる。

2. トイレトレーニングには、集団保育が効果を発揮する

続いて、表2-2-1にあげた項目のいくつかについて、月齢ごとによる差を図2-2-1~7にまとめた。調査時点から換算し、年少児は3歳10か月~4歳9か月、年中児は4歳10か月~5歳9か月、年長児は5歳10か月~6歳9か月、小学1年生は6歳10か月~7歳9か月までとなっている。また、いずれの図においても、棒グラフは「とてもあてはまる」の割合を、折れ線グラフは「とても+まああてはまる」の合計を表したものである。

まず、図2-2-1は、「1人でトイレでの排泄、後始末ができる」の結果である。全体の傾向をみると、低月齢から徐々に「できる」という割合が増えていて、最終的には9割以上の子どもが達成している。ただし、図

から読み取れるように、年中児（5歳9か月）から年長児（5歳10か月）の境目で、値が大きく変化している。つまり、1人でトイレがうまく使えるかどうかは、月齢の差よりも、学年による差が大きいということである。よって、トイレに関する生活スキルの獲得の背景には、集団保育の効果があるものと考えられる。

3. 幼児期から小学校にかけて、子どもの社会性、協調性スキルがいったん低下する

図2-2-2は「人に自分の気持ちを伝えたり、相手の意見を聞いたりすることができる」、図2-2-3は「遊びなどで友達と協力することができる」の結果を示した。これらは表2-2-1にしたがえば、「自己主張」や「協調性」といった分類に含まれる。「自己主張」や「協調性」は、子どもが他者とうまくかわるうで、必要となる能力である。つまり、子どもの社会性を支える力といえるだろう。

いずれの項目についても、「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の合計は低月齢児のころから比較的高い割合を示しているが、「とてもあてはまる」だけをみると、小1生でも5割を下回っている。達成状況の流れから、年少児、年中児、年長児いずれにおいても、月齢が低い群では達成率が低く、その後なだらかに上昇し、学年が変わるとその学年の低月齢児は、前の学年の高月齢児よりもポイントが落ちるというような波を描いている。そして、小学校に入学すると、全体的に達成率が落ち、年長児の平均よりも低くなっている。これは、園から小学校への環境の変化に適応するために時間がかかるという可能性とともに、先述したとおり、幼児期と小学校とでは求められる能力の水準が異なるという可能性も考えられる。

図2-2-1 一人でトイレでの排泄、後始末ができる (月齢別)

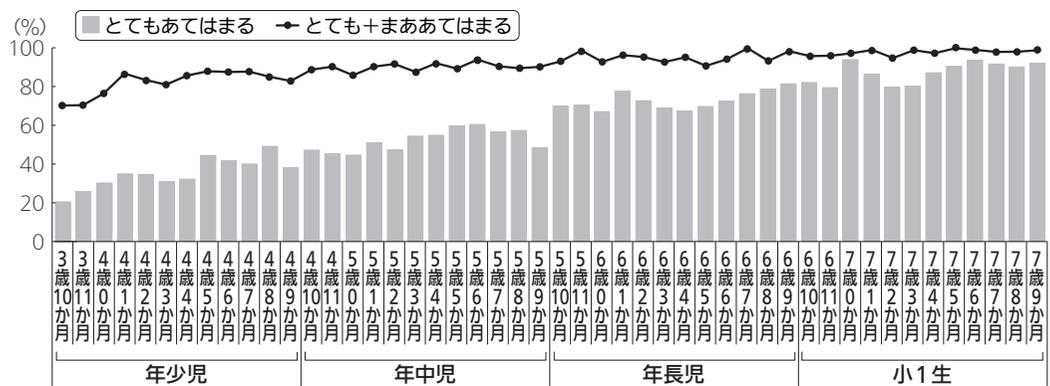


図2-2-2 人に自分の気持ちを伝えたり、相手の意見を聞いたりすることができる (月齢別)

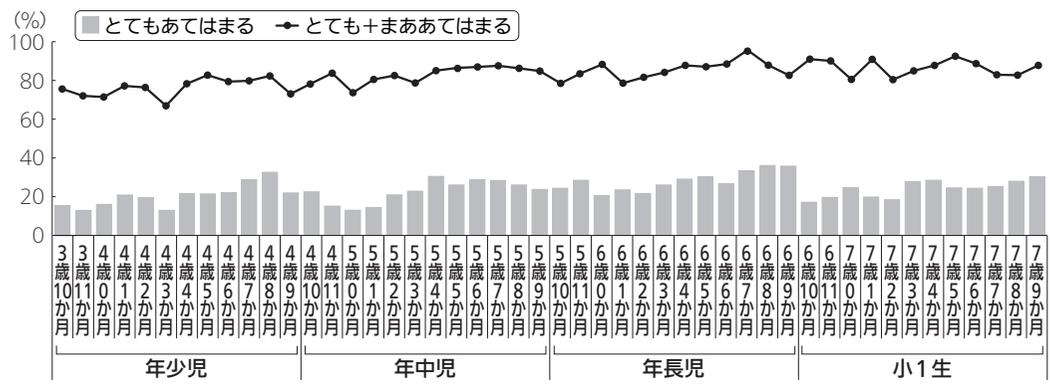
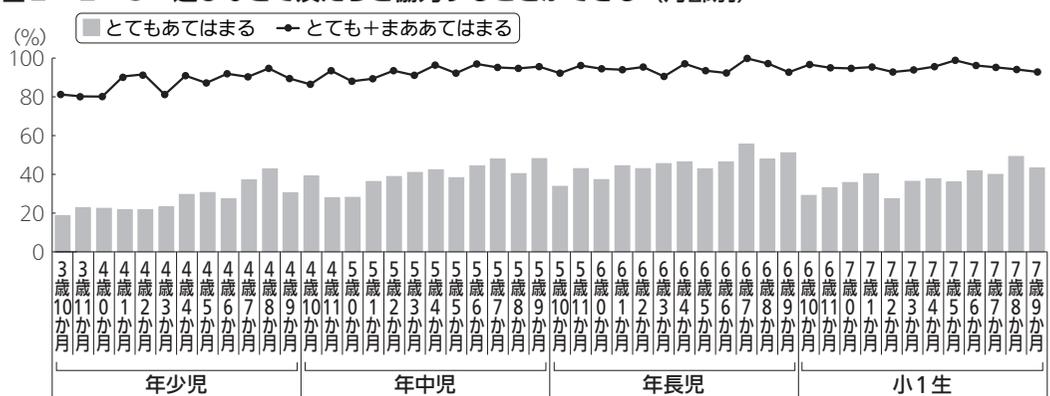


図2-2-3 遊びなどで友だちと協力することができる (月齢別)



4. 「物事をあきらめずに、挑戦することができる」力を獲得できている子どもは少ない

図2-2-4は「物事をあきらめずに、挑戦することができる」、図2-2-5は「好きなことに集中して遊べる」の結果である。これらは、小学校以降の学びを支えるために重要な力である。いずれの達成率も全体的には学年とともに緩やかに上昇しているが、月齢によって大きな違いがあるわけではなく、もともとの子どもの性格などに影響される部分が大いことが予想される。ただ、表2-2-1でも示したように、「好きなことに集中して遊べる」は、すべての学年で達成率が高いが、「物事をあきらめずに、挑戦することができる」は他の項目に比べて著しく低い。つまり、好きなことなら頑張れるが、自分に向かないこと、うまくいかないことに対して粘り強く取り組んでいくことは苦手な子どもが多いということである。図2-2-4からわかるとおり、こうした能力は、年齢の上昇とともに自然に獲得されていくわけではないことをふまえ、保育や幼児教育、あるいは家庭において、こういった支援やかかわりが必要であるかを考えていくことが重要である。

5. 幼児期における文字の読み書きの習得率は高い

図2-2-6~7はことばに関する能力についてまとめたものである。いずれも小1生での調査結果はないが、学年の上昇とともに達成率が高まっている。とくに「自分の名前をひらがなで書ける」では、年長児になる前にほとんどの子どもができるようになってきている。これは家庭でも園でも比較的取り組みやすいこと、また、小学校への準備として意識されやすいことなどとも関連しているだろう。一方で、「自分のことばで順序をたてて、相手にわかるように話せる」では名前を書くことに比べて達成率が低く、「まああてはまる」を含めた値と「とてもあてはまる」だけを示した値との差も大きい。この項目は、表2-2-1では「思考・論理性」を構成する能力に含まれる。幼児期では、ことばに興味をもち、ひらがなを読んだり自分の名前を書いてみたりする経験も重要だが、ことばを単なるコミュニケーションツールとしてだけでなく、思考の道具として使用できるようになるためにも、こうした能力を徐々に身につけていくことが必要であろう。

図2-2-4 物事をあきらめずに、挑戦することができる（月齢別）

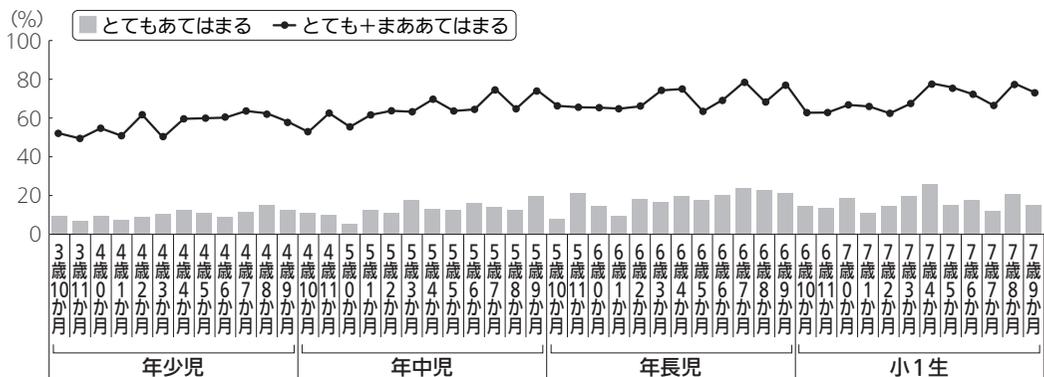


図2-2-5 好きなことに集中して遊べる（年少児～年長児・月齢別）

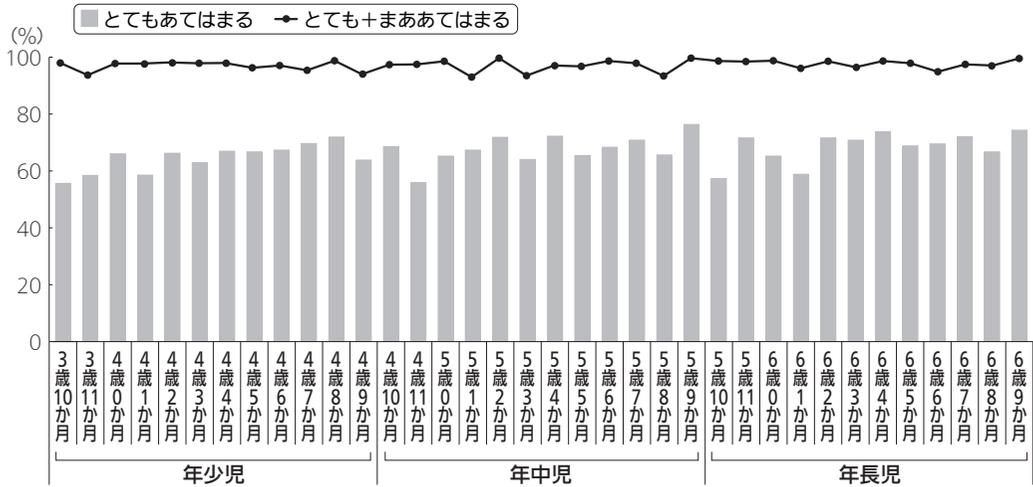


図2-2-6 自分のことばで順序をたてて、相手にわかるように話せる（年少児～年長児・月齢別）

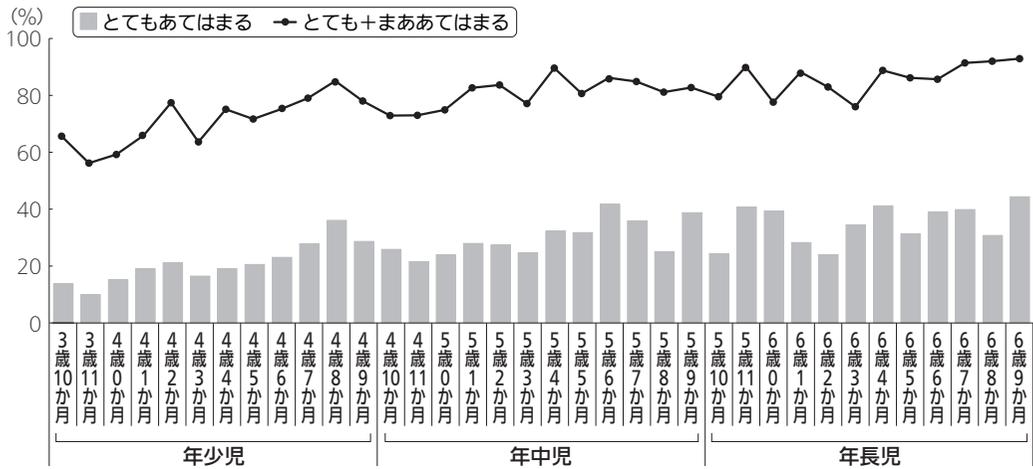
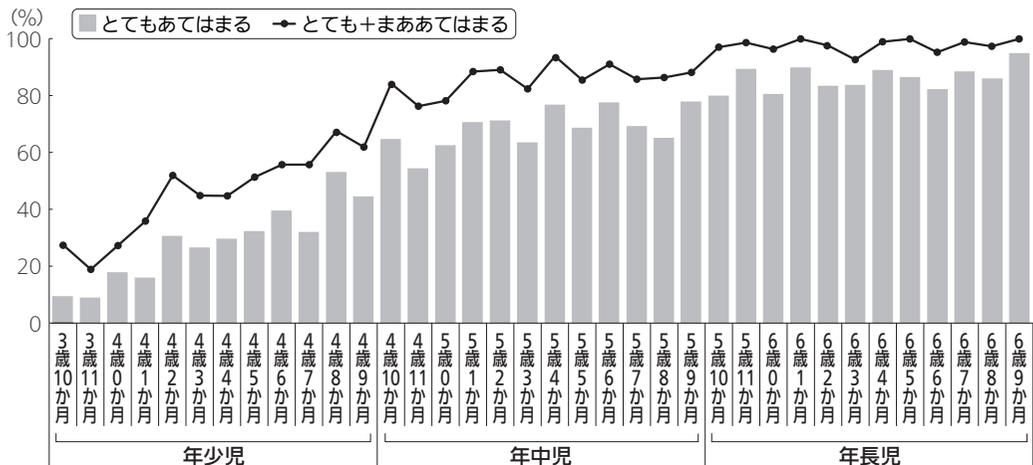


図2-2-7 自分の名前をひらがなで書ける（年少児～年長児・月齢別）



第3節 * 小1生の家庭学習の様子

田村徳子



小1生が家庭で学習する時間は30分くらいがもっとも多い。家庭での学習の取り組みは、宿題や翌日の準備など小学校の学習生活と直接結びつくことを行う割合が高い。勉強が終わるまで集中して取り組むのは、やや難しい様子がうかがえる。

調査時期の1～2月は、小1生にとって10か月近く小学校生活を送っている時期である。この時期、家庭では、どのように学習に取り組んでいるだろうか。

1. 家庭での学習時間でもっとも多いのは、30分くらい

図2-3-1は、小1生に、平日の家庭での学習時間を聞いた結果である。「30分くらい」がもっとも多く、45.4%だった。「15分くらい」～「45分くらい」までが全体の約8割を占めている。図示は省略するが、母親の就業状況による差がみられた。学習時間が「45分くらい」以上の割合をみると、正社員20.5%<パート・アルバイト28.1%<専業主婦35.4%だった。母親が専業主婦の場合、家庭での学習時間がやや長い傾向だった。

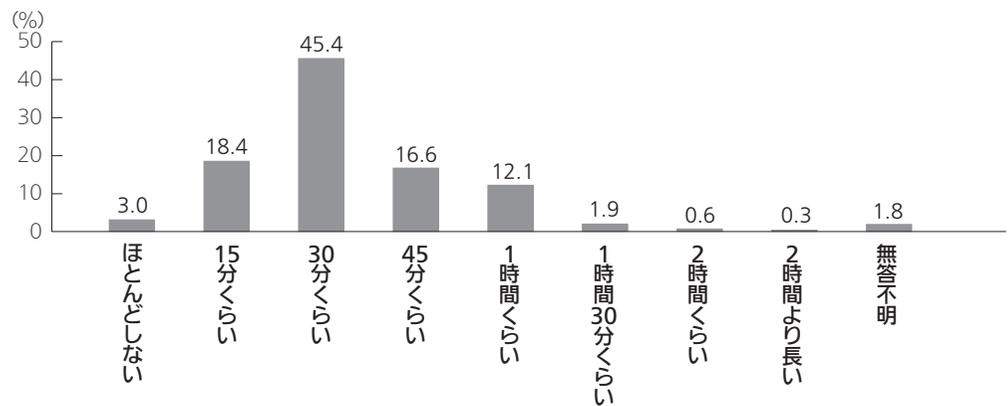
2. 家庭での学習の取り組みは、小学校の学習生活と直接結びついて築かれる傾向

図2-3-2は、家庭での学習の取り組みの様子について回答してもらった結果である。「とてもあてはまる」の多い順に、「学校から出された宿題をやる」84.8%、「毎日楽しく学校に通っている」74.2%、「自分で翌日の学校の準備をする」59.1%、「学校から

の連絡物を家族に渡す」56.0%、「家で学校でのできごとについて話す」43.8%と学校に直接かかわる項目が並んだ。次に、学校以外で学習への興味や関心にかかわる項目で「図書館で本を読んだり、借りたりする」36.0%、「興味をもったことについて、学校の勉強にかかわらず知ろうとする」29.6%が続いた。最後に、「机に向かったら、すぐ勉強にとりかかる」「大人に言われなくても自分から進んで勉強する」「勉強が終わるまで集中して取り組む」「勉強をされていて、わからないとき、自分で考え、解決しようとする」といった学習への取り組みの姿勢に関する項目が並んだ。家庭での学習の取り組みは小学校の学習生活と直接結びついて築かれる様子がうかがえる。

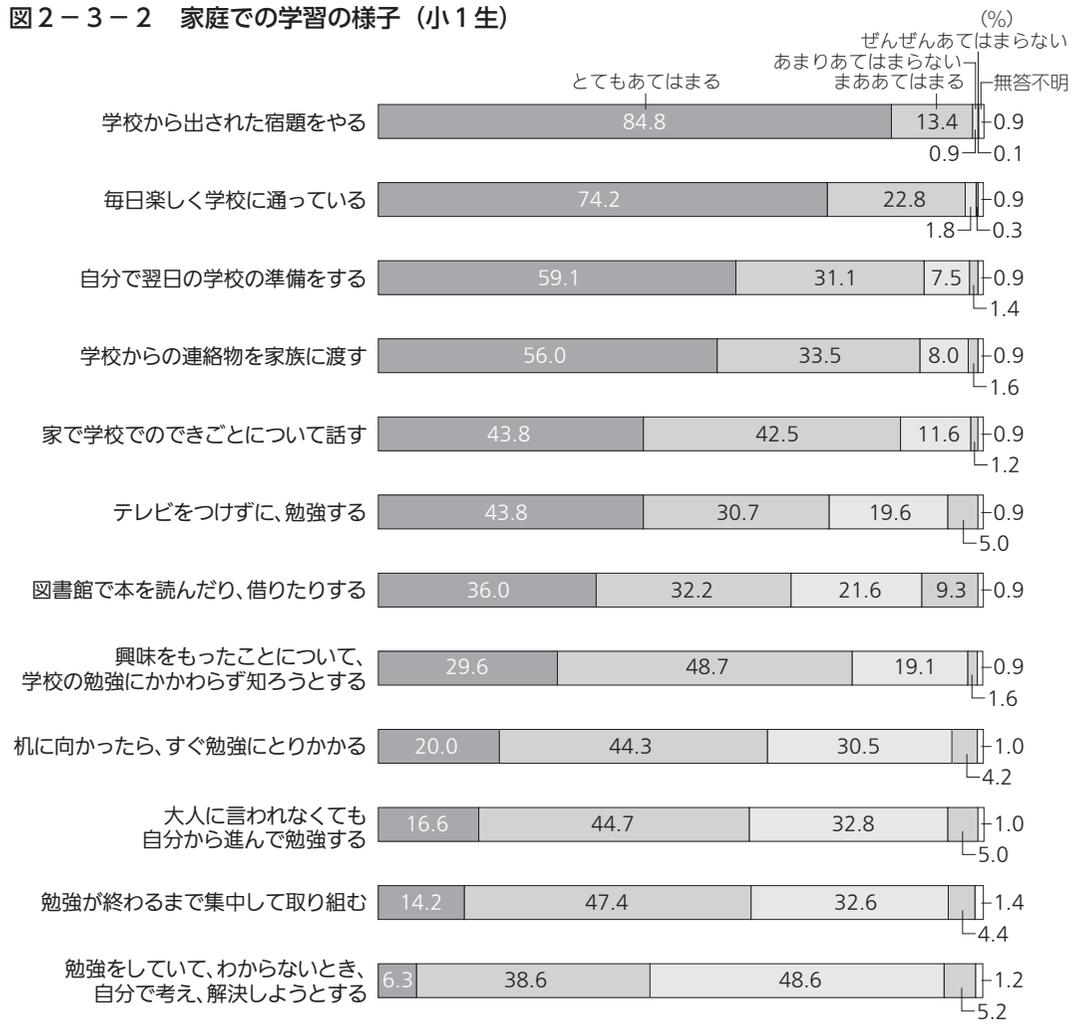
子どもの出生順位別でみたとき、学習への取り組みの姿勢で差がみられた。「あてはまる(とても+まあ)」と回答した割合は、「机に向かったら、すぐ勉強にとりかかる」第1子60.3%<第2子以降67.9%、「大人に言われなくても自分から進んで勉強する」第1子55.2%<第2子以降66.5%、「勉強が終わるまで集中して取り組む」第1子57.0%<第2子以降65.6%と、第1子に比べて第2子以降のほうが高かった。学習にどう取り組めばよいかの身近なモデルを子どもに示すことが効果的なかもしれない。

図2-3-1 平日（学校がある日）の家庭での学習時間（小1生）



注1) 塾での勉強時間を除く。
注2) サンプル数は1,285人。

図2-3-2 家庭での学習の様子（小1生）



注) サンプル数は1,285人。

第4節 ＊ 生活習慣、学びに向かう力、文字・数・思考の関連

田村徳子

年長児でみた場合、生活習慣、学びに向かう力、文字・数・思考の育ちにはそれぞれ関連がみられた。また、幼児期に集中・興味・質問の経験や文字・数に親しむ習慣があるほど、小1生で家庭での学習に向かう姿勢が高い傾向がみられた。

子どもの生活習慣、学びに向かう力、文字・数・思考の育ちには、どのような関係があるのだろうか。子どもの学年によって、できることに差が出るため、この節では年長児についてみていきたい。なお、調査時期である1～2月は、年長児にとって小学校入学直前の時期にあたる。

1. 生活習慣の育ちと、学びに向かう力、文字・数・思考の育ちには関連がみられる

生活習慣の育ちは、学びに向かう力や文字・数・思考の育ちとどのような関係があるだろうか。生活習慣にかかわる7項目（「夜、決まった時間に寝ることができる」、「脱いだ服を自分でたためる」、「食事が終わるまで、席に座ってられる」、「好き嫌なく食事ができる」、「1人でトイレでの排泄、後始末ができる」、「まわりの人に『おはよう』『さようなら』『ありがとう』などのあいさつやお礼を言える」、「家で遊んだ後、片付けができる」）について得点化して平均点を3区分し、生活習慣が身についているかについて「とてもそう群」、「まあそう群」、「あまりそうでない群」とした（7項目について、「とてもあてはまる」を4点、「まああてはまる」を3点、「あまりあてはまらない」を2点、「ぜんぜんあてはまらない」を1点として加算し、平均点を算出。なお、

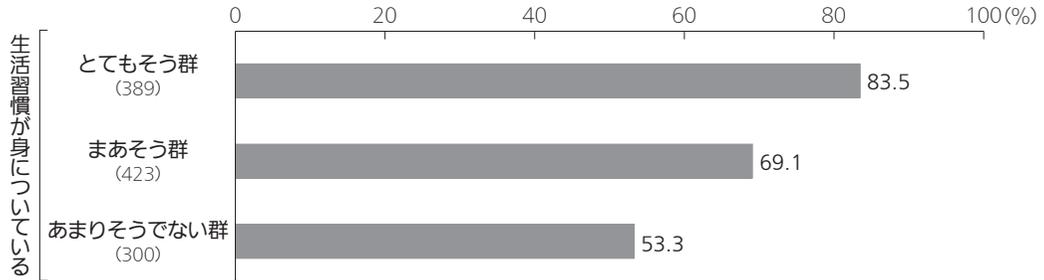
7項目すべて回答した人のみ分析した。）

生活習慣と学びに向かう力の関係はどうか。図2-4-1をみると、「物事をあきらめずに、挑戦することができる」割合は、生活習慣が身につけているかについて「とてもそう群」83.5%、「まあそう群」69.1%、「あまりそうでない群」53.3%だった。また、図2-4-2をみると、「人の話が終わるまで静かに聞ける」割合は、同様に「とてもそう群」90.2%、「まあそう群」78.2%、「あまりそうでない群」63.0%だった。生活習慣が身につけているほど、学びに向かう力の割合が高い傾向がみられた。

では生活習慣と文字・数・思考の関係はどうか。図2-4-3をみると、「指やおはじきなどを使って、数を足したり、引いたりすることができる」割合は、生活習慣が身につけているかについて「とてもそう群」で92.0%、「まあそう群」で87.2%、「あまりそうでない群」で81.7%だった。図2-4-4をみると、「自分のことばで順序をたてて、相手にわかるように話せる」割合は、生活習慣が身につけているかについて「とてもそう群」92.3%、「まあそう群」88.7%、「あまりそうでない群」75.0%だった。

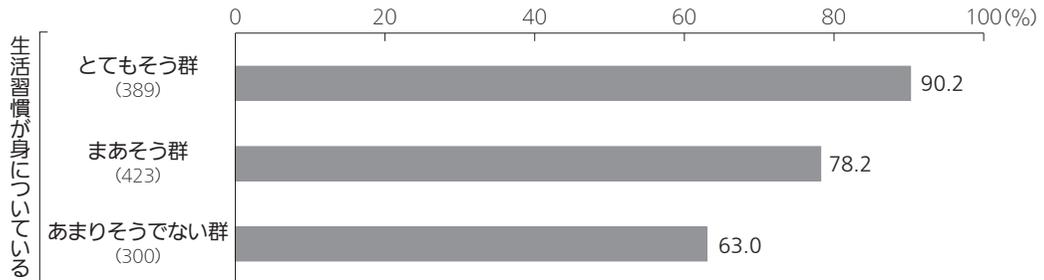
本調査では生活習慣の育ちは、学びに向かう力、文字・数・思考の育ちと関連していることがうかがえる結果だった。

図2-4-1 物事をあきらめずに、挑戦することができる（年長児・生活習慣別）



注1) 「とても+まああてはまる」の%。
 注2) ()内はサンプル数。

図2-4-2 人の話が終わるまで静かに聞ける（年長児・生活習慣別）



注1) 「とても+まああてはまる」の%。
 注2) ()内はサンプル数。

図2-4-3 指やおはじきなどを使って、数を足したり、引いたりすることができる（年長児・生活習慣別）



注1) 「とても+まああてはまる」の%。
 注2) ()内はサンプル数。

図2-4-4 自分のことばで順序をたてて、相手にわかるように話せる（年長児・生活習慣別）



注1) 「とても+まああてはまる」の%。
 注2) ()内はサンプル数。

2. 学びに向かう力の育ちと、文字・数・思考の育ちには関連がみられる

学びに向かう力の育ちと文字・数・思考の育ちにはどのような関係があるだろうか。

図2-4-5～7は、学びに向かう力と文字・数・思考の関係についてみたものである。学びに向かう力にかかわる24項目（「好きなことに集中して遊べる」、「人に自分の気持ちを伝えたり、相手の意見を聞いたりすることができる」、「物事をあきらめずに、挑戦することができる」、「人の話が終わるまで静かに聞ける」など。詳細は資料編の調査票を参照。）について、得点化して平均点を3区分し、学びに向かう力が身についているかについて「とてもそう群」、「まあそう群」、「あまりそうでない群」とした。（24項目について、「とてもあてはまる」を4点、「まああてはまる」を3点、「あまりあてはまらない」を2点、「ぜんぜんあてはまらない」を1点として加算し、平均点を算出。）なお、24項目すべて回答した人のみ分析した。ここでは、文字・数・思考のうち、代表して3つの項目についてみていきたい。

図2-4-5をみると、「身の回りにあるものの長さや大きさ、高さを直接並べて比べられる」の割合は学びに向かう力が「とてもそう群」97.6%、「まあそう群」96.7%、「あまりそうでない群」82.5%だった。また、図2-4-6をみると、「指やおはじきなどを使って、数を足したり、引いたりすることができる」割合は、学びに向かう力が「とてもそう群」94.7%、「まあそう群」92.1%、「あまりそうでない群」76.2%だった。学びに向かう力が身につけている群ほど長さや大きさ、高さを比べたり、数の足し引きのできる割合が高い傾向がみられた。では、ことばの順序だてについてはどうだろうか。図2-4-7をみると、「自分のことばで順序をたてて、

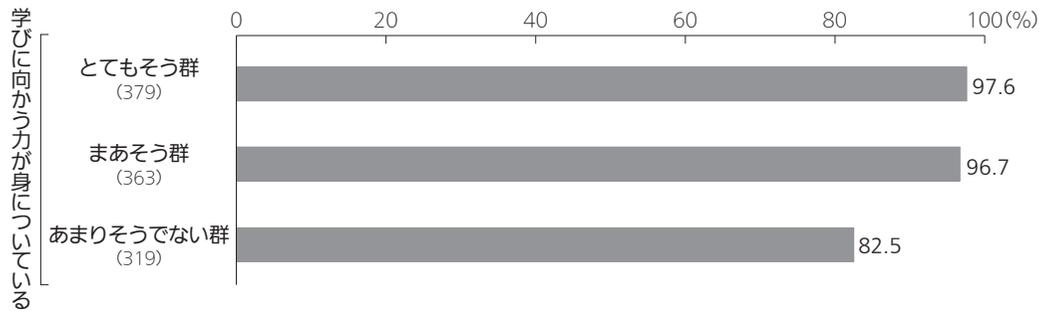
相手にわかるように話せる」割合は、「とても+まああてはまる」で、学びに向かう力について「とてもそう群」96.6%、「まあそう群」91.5%、「あまりそうでない群」69.3%だった。学びに向かう力が身につけているほど、ことばの前後関係をとらえ、順序だてて相手に伝えられる割合が高い傾向がみられた。いずれも、学びに向かう力についての3区分のうち、とくに「まあそう群」と「あまりそうでない群」の間に10ポイント以上の差があり、学びに向かう力の育ちと文字・数・思考の育ちには関連がみられる結果となった。

3. 土台としての「学びに向かう力」の育ち

幼児期の生活習慣、学びに向かう力、文字・数・思考の育ちの関係をみてきたが、本調査では、この3つがお互いに関連する傾向がうかがえた。私たちは、生活習慣が身についているか、文字・数・思考をどれだけ習得できているのかといった子どもの行動に表れやすいものに注目し、その成長に喜び、驚き、しばしば気がかりに思う。とくに文字・数については、語彙を増やしたり、より多くの数を数えられたりすることに注目が偏ることもある。しかし、知識を増やすだけでなく、知識を深く理解しようとし、思考を深めていくことも学びには必要であろう。

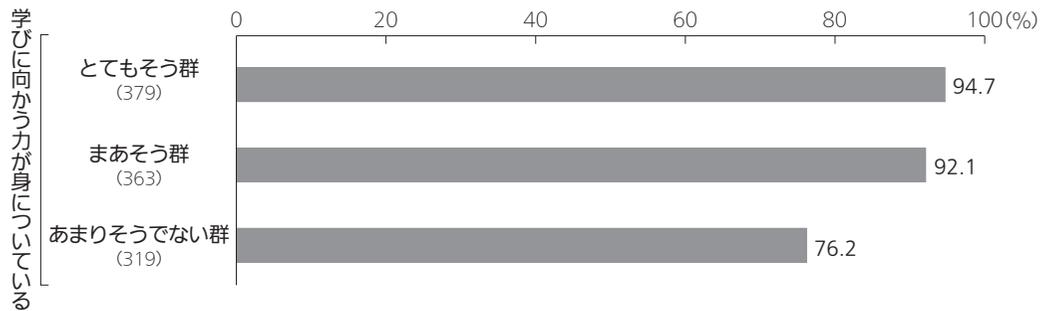
また、学びに向かう力の育ちが文字・数・思考の育ちと関連し、子どもの成長を支える土台として重要なことが示唆された。学びに向かう力は、子どもの内面の成長であり、第1節でもみてきたように、親の目からみて成長がゆるやかで、注目しにくい部分がある。今後、子どもの実態をよくふまえながら、子どもの学びに向かう力がどのように子どもの育ちにかかわるのかについて、さらに考察を深める必要があると思われる。

図2-4-5 身の回りにあるものの長さや大きさ、高さを直接並べて比べられる
(年長児・学びに向かう力別)



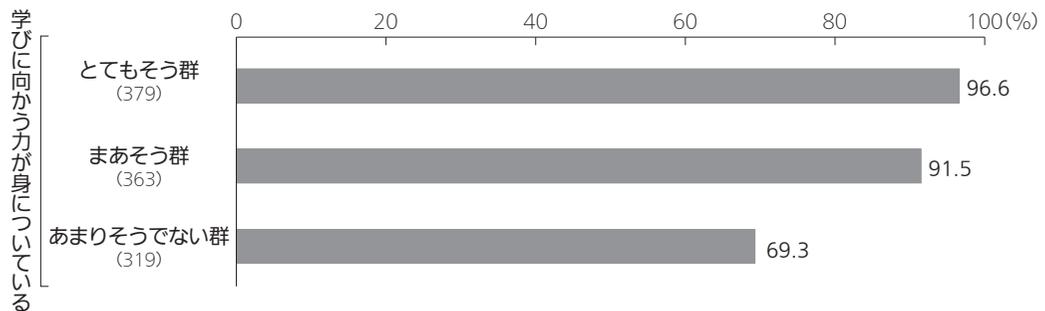
注1) 「とても+まああてはまる」の%。
注2) ()内はサンプル数。

図2-4-6 指やおはじきなどを使って、数を足したり、引いたりすることができる
(年長児・学びに向かう力別)



注1) 「とても+まああてはまる」の%。
注2) ()内はサンプル数。

図2-4-7 自分のことばで順序をたてて、相手にわかるように話せる
(年長児・学びに向かう力別)



注1) 「とても+まああてはまる」の%。
注2) ()内はサンプル数。

4. 幼児期に集中・興味・質問の経験や文字・数に親しむ習慣があるほど、小1生で家庭での学習に向かう姿勢が高い傾向

幼児期の学びに向かう力の育ちや文字・数・思考の育ちと、小1生で家庭での学習に向かう姿勢にはどのような関係があるだろうか。

図2-4-8~9は、幼児期の集中・興味・質問の経験と小1生で家庭での学習に向かう姿勢の関係についてみたものである。幼児期を振り返って集中・興味・質問の経験にかかわる3項目「好きなことに集中して遊んでいた」、「生き物や植物に興味をもっていた」、「わからないことについて、『なぜ、どうして』など、まわりに質問していた」について、「とてもあてはまる」を4点、「まああてはまる」を3点、「あまりあてはまらない」を2点、「ぜんぜんあてはまらない」を1点として算出し、平均点を3区分した。なお、3項目すべて回答した人のみ分析した。

図2-4-8をみると、小1生で「机に向かったら、すぐ勉強にとりかかる」割合は、「あてはまる（とても+まあ）」で、幼児期の集中・興味・質問の経験について「とてもあった群」67.8%、「まああった群」65.0%、「あまりなかった群」53.2%だった。また、図2-4-9をみると、「勉強が終わるまで集中して取り組む」割合は、同様に「とてもあった群」65.2%、「まああった群」64.7%、「あまりなかった群」44.4%だった。幼児期の集中・興味・質問の経験で「とてもあった群」と「まああった群」にほぼ差がないが、「まああった群」と「あまりなかった群」には10ポイント以上の差がみられた。

図2-4-10~11は幼児期の文字・数に親しむ習慣と小1生で家庭での学習に向かう姿勢の関係についてみたものである。幼児期を振り返って文字・数に親しむ習慣にかかわる6項目「1、2、3、4と、20までの

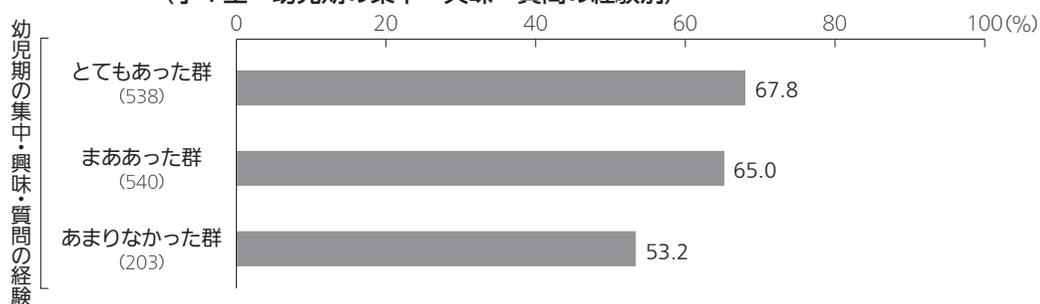
数を正しく数えられた」、「指やおはじきなどを使って、数を足したり、引いたりすることができた」、「自分の名前を読めた」、「自分の名前をひらがなで書けた」、「かな文字を読めた」、「絵本や図鑑を1人で読めた」について、「とてもあてはまる」を4点、「まああてはまる」を3点、「あまりあてはまらない」を2点、「ぜんぜんあてはまらない」を1点として算出し、平均点を3区分した。なお、6項目すべて回答した人のみ分析した。図2-4-10をみると、小1生で「机に向かったら、すぐ勉強にとりかかる」割合は、「あてはまる（とても+まあ）」で、幼児期の文字・数に親しむ習慣について「とてもあった群」73.1%、「まああった群」64.3%、「あまりなかった群」54.4%だった。図2-4-11をみると、「勉強が終わるまで集中して取り組む」割合は、同様に「とてもあった群」72.0%、「まああった群」62.3%、「あまりなかった群」48.7%だった。

幼児期に集中して遊んだり、好きなことに没頭したり、興味をもってまわりに質問したりなどの豊かで十分な経験が、小1生において家庭で学習に取り組むときの主体性や、家庭生活のなかで学習の時間として切り替えて集中するときの抑制と関連するのかもしれない。また、幼児期に文字や数に親しむ習慣は、小1生で学校の授業の内容と結びついた宿題を行う際に、取り組みやすさにつながる可能性も考えられる。

今後、子どもが幼児期から小学校入学後の児童期にかけて学習環境が変わるとき、子ども自身が学ぶことの楽しさや大切さを感じて家庭でも主体的に学習に取り組めるようにするにはどのようなことが必要か、また、知識を増やし理解を深められるようにするには家庭教育でどのようなことが必要かをさらに検討する必要があるだろう。

図2-4-8 机に向かったら、すぐ勉強にとりかかる

(小1生・幼児期の集中・興味・質問の経験別)

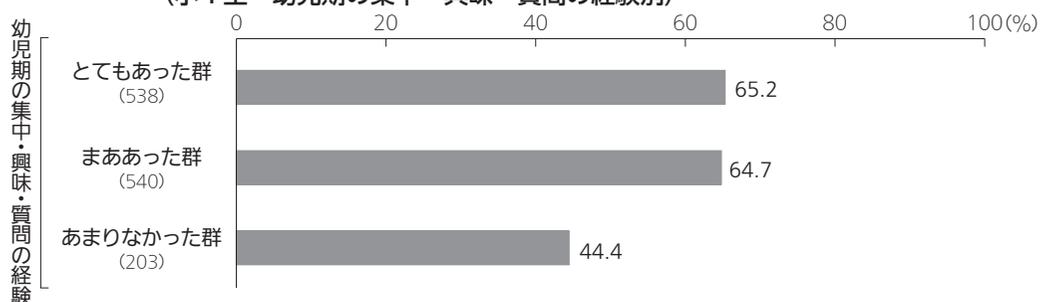


注1) 「とても+まああてはまる」の%。

注2) () 内はサンプル数。

図2-4-9 勉強が終わるまで集中して取り組む

(小1生・幼児期の集中・興味・質問の経験別)

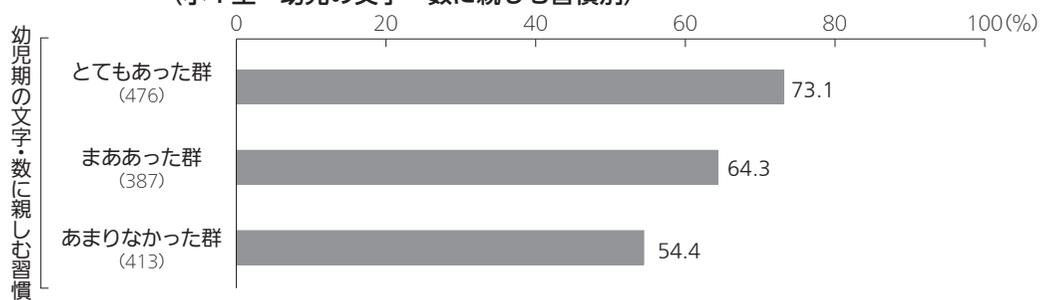


注1) 「とても+まああてはまる」の%。

注2) () 内はサンプル数。

図2-4-10 机に向かったら、すぐ勉強にとりかかる

(小1生・幼児期の文字・数に親しむ習慣別)

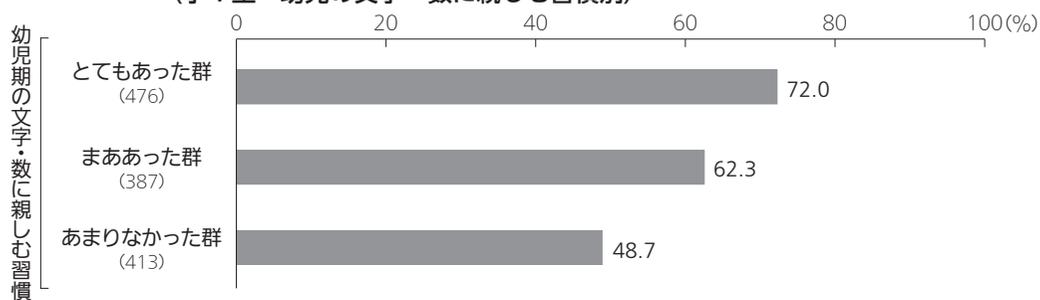


注1) 「とても+まああてはまる」の%。

注2) () 内はサンプル数。

図2-4-11 勉強が終わるまで集中して取り組む

(小1生・幼児期の文字・数に親しむ習慣別)



注1) 「とても+まああてはまる」の%。

注2) () 内はサンプル数。